

## 紙芝居で子どもに伝わる「心の教育」。 3年間の成果が現れ始めた。

社団法人「小さな親切」運動本部が推進している「心の教育」プロジェクト。その具体的なツールとなる3種類の紙芝居がAJOSCの助成を受けて制作されて3年になる。この間、多くの子どもたちに「親切」への問いかけを行ってきたが、今回は実際の授業風景を報告する。



プロの俳優が話し手を務めるため声が遠くまで届き、聞きやすい



子どもたちにクイズを出したり疑似体験させ、物語の意味をうまく伝えていく



小道具を使いながら分かりやすいように進められる授業

クイズと寸劇で、子どもたちの関心度を高める。

東京都世田谷区立京西小学校のパソコンルームに95名の1年生が集まった。普段は「紙芝居」など見ない子どもたちも教壇の上の紙芝居の入った箱に興味深そうに眺めている。紙芝居は3種類あるが、今回は低学年向けのバージョン「しんせつってなあーに？」である。他の人のために「エレベーターのボタンを押してあげる」という何気ない行為から、親切とは相手を思いやる優しさが元になった行動であることを分かりやすく伝えるストーリーだ。

紙芝居が始まった。話し手はプロの俳優さんだから声は遠くまで届き、リズム感もいい。聞き手の子どもたちはというと、すぐにストーリーに夢中になる子もいれば、横目でちらちらと見る子もいる。ある程度紙芝居が進んだところで、一度ストーリーを止めた。

先生が、主人公のともこちゃんの顔が書かれた場面のシートを取り出して「どうしてともこちゃんは最初はニコニコしていたのに、今度はこんな顔になっちゃったんだろう。わかる人、手をあげて！」と問いかけた。

最初は数人が手をあげただけであったが、徐々にあがる手が増えていった。ホワイトボードには子どもたちの回答が書き出されていく。自分の発言がホワイトボードに書かれることは子ども心にも嬉しいようだ。

次に子どもたちに主人公の役で紙芝居の1シーンを演じさせた。エレベーターでボタンを押してもらいながら、なにも言わずに立ち去る人の役をスタッフが演じると、主人公役の子どもたちは「なんかいやな気持ちになった」と答える。

紙芝居としてただ見るだけではなく、クイズを出したり、疑似体験させることで物語の意味を伝えようという工夫だ。そこまで集中せずに聞いていた子の注意もこの寸劇でつながった。3年の時を経て見せ方のノウハウも蓄積されてきているようだ。

3年間で種まきは終了し、育てていく時期に入った。

この日、同校は公開授業だったので父兄にも話を聞いたところ、「知の教育と平行して心の教育は欠かせないと思う。機会を設けてまたお願いしたい」という回答が多かった。難しい質問に子どもが答えているのを聞いて驚いているお母さんもいた。親が思う以上に子どもの理解力や感度は高いともいえるだろう。

そうであれば、少しでも多くの小学校に利用してもらいたいものだが、今の学校制度はそう簡単にはいかない。あらかじめ年間のカリキュラムが決められてしまうと、他の内容を組み込むのは容易ではないのだ。とはいえ、紙芝居の存在は徐々に浸透してきている。協力校も初年度より20校増えて26校になった。

また「小さな親切」運動本部のホームページでは、黒板で使用する教材を含めた紙芝居一式を誰でもダウンロードして使えるようになっている。教師がそれを利用して授業をする場合は、材料費の補助もしており、この仕組みを使っている教師の数はかなり増えている。

同運動本部 事務局長の山橋由貴子さんは

「3年間で教材も増えてきてその使い勝手の良さには定評がありますので、あとはいかに利用度をあげるかですね。これまでの活動で種まきの期間は終わったと思っ

担当者より



少しでも早い時期に心の教育を。

社団法人「小さな親切」運動本部  
事務局長  
山橋由貴子さん

この活動も3年継続しました。AJOSCにはあらためて感謝申し上げます。小学生も高学年になると人間性はある程度決まってしまう。少しでも幼い頃に心の教育に触れることが必要で、今後はそちらへ向かって進みたいと考えております。

ています。今はプロの講師の先生を招いていますが、長期的、広域的な利用を考えた場合には、各地域で有志の方を講師に育てていくという時期に来ていると考えています」と語った。

また、2010年度には新しい紙芝居が加わる。割れたチャボの卵を題材にして、友だちとの関係づくりや人の気持ちを察するというようなことが描かれたものだ。構想から完成までは約1年。それぞれの道のプロが意見を戦わせてできた労作だそうだ。少しでも多くの子どもたちがこうした教材に刺激をうけて、「親切」を素直に表現できる人間に育つことを期待したい。



過去の3作品と今回新しく加わった「だいじなたまご」